

聖書：ヨハネの黙示録 4：1～11

説教題：御座に着いている方

日時：2021年1月24日（朝拝）

1 節は「その後、私は見た」と始まり、ここから新しい幻が記されていることが分かります。今回、彼がまず見たのは開かれた門が天にあるという光景でした。「開かれた門」は3章8節に出て来ました。天の御国に入るための門です。またラッパのような音で語りかける声を聞きました。「あの最初の声」と言われていますが、それは1章10～13節に記されていたイエス・キリストの声です。つまりキリストがヨハネに「ここに上れ。この後必ず起こることを、あなたに示そう。」と言われたわけです。上るように招かれた「ここ」とは開かれた門の先にある天の世界でしょう。また「この後必ず起こること」とは、1章1節や19節で見て来ましたように、世の終わり直前の出来事と言うよりは、聖書が言う「終わりの日」（主の復活から再臨の日までの全期間）全体に関わるものです。そのヨハネが御霊に捕らえられて引き上げられて見たのは、まず天の御座でした。そこはどのような場所か、またそこからは地上の出来事はどう理解されるのか、いわばその天の視点がここに与えられようとしているわけです。

これは地上の人間がいくら知恵を絞っても知り得ないことです。私たちの間には天に行って、その光景を見て来た人はいません。Ⅱコリント12章でパウロが第三の天にまで引き上げられた時のことについて語っていますが、他にそういう人はいません。しかしヨハネは幻の内にそれを見させられ、その様子をここに記しています。ある人はこれを空港の管制塔に連れて行かれたことにたとえました。広い空港の中を歩いていると、飛行機が次々に離着陸したり、そのための様々な作業が行われている個々のケースについて見ることはできますが、全体がどうなっているかまでは分かりません。しかし管制塔に連れて行かれれば、すべてを俯瞰することができます。あらゆることが秩序だって動いていることが分かります。そのように、この天にある御座は世界と宇宙全体のコントロールタワーのようなところです。そこからこの世界と歴史をどう見るべきかがこれから示されて行きます。

この「御座」（ギリシャ語のスロノス、英語の throne に相当）とは王座という意味です。世では当時、ローマ皇帝ドミティアヌスが世界を支配する王座に着いてい

ました。しかしその王座にはるかに勝る王座がここにあるということです。それは天にある王座です。世界を真の意味でコントロールする座です。後にこの御座から世界に対するさばきが行われるのを私たちは見ます。ですからこここそ世界と宇宙の真の御座、究極のさばき主がおられる座ということになります。

その御座に着いている方が3節では宝石のたとえで語られています。最初に「碧玉」と出て来ますが、これは後に21章の新しい天と新しい地の光景にも出て来ます。神のみもとから降って来た聖なる都について、21章11節にこうあります。「都には神の栄光があった。その輝きは最高の宝石に似ていて、透き通った碧玉のようであった。」ここに碧玉が最高の宝石に似ているとか、透き通っていて輝きを放つものとの関連で語られています。その後の18節にも「都の城壁は碧玉で造られ」と出て来ます。2つ目の「赤めのう」も、そのすぐ後、21章20節に都の土台石の宝石の一つとして出て来ます。このように天の都はあらゆる宝石で飾られた場所にたとえられますが、その基礎は何よりも神ご自身がそのような方であるということです。今日の箇所に見る神のお姿は、やがて現れる天の都の光景を予告するものであり、神はその都を要約するような輝きに満ちた方であられるということです。なおこの碧玉と赤めのうは大祭司の胸当てにはめられる12の宝石のリストの最初と最後に出て来るものでもあります(出エジプト記28章17~20節)。またこのような神の描写は、1テモテ6章16節で、神が「近づくこともできない光の中に住まわれる方」と語られていることと一致するものとして考えることができます。

「御座の周りには、エメラルドのように見える虹があった」とあります。これも天の御座のこの上ない美の世界を私たちに示しています。虹はノアとの契約を思い起こさせるものです。つまり神は恵みで特徴づけられる方である。あわれみ深く、また契約に忠実な方であられるということです。

さて4節以降には御座の周りで仕える2つの存在のことが記されます。まず4節に24の座と24人の長老たちが出て来ます。これは一体誰なのでしょう。ある人はダビデは主の宮のために24人の祭司たちとレビ人たちを任命したことがI歴代誌24~25章に記されていることに対応して、そのように神のみそば近くで奉仕する特別な人たちを指すのではないかと考えます。またある人はこの24は12+12で、旧約のイスラエル12部族と新約の12使徒を合わせたものである。従ってこれは旧

約と新約を貫く全時代の神の民・教会を象徴すると言います。しかしこの後の黙示録を読んで分かることは、これは贖われた神の民たちそのものではないということです。5章10節を見ると、24人の長老たちは後に出て来る4つの生き物と一緒に新しい歌を歌いますが、その中で救いを受ける民たちのことを「彼ら」と表現しています。自分たちを含めず、第三者の立場から表現しています。同じく7章13～14節で長老の一人がヨハネに幻の意味を説明する際、救われる人たちのことを「この人たちは」と呼んで、自分たちと区別しています。ですからこの24人の長老たちは救いの民とイコールではなく、天的存在であると考えられます。すでに私たちはこの黙示録の中で、7つの金の燭台に対応する7つの星、すなわち7つの教会に対応する7つの教会の御使いたちについて見て来ました。7つの教会に対する主のメッセージも、それぞれの教会の御使いに書き送れ！と言われていました。ですからこの24人の長老たちも、神の民と関連し、神の民を代表するような天使的存在であると考えられます。

御座の光景として、さらにいくつかのことが5～6節前半に記されています。5節に「稲妻」「雷鳴」のことが記されます。これはシナイ山で律法を授与された時の光景を彷彿とさせます。この後、黙示録ではさばきと関連して、この表現が繰り返し出て来ます。また7つのともしびとしての神の7つの御霊が述べられています。これまでも出て来ましたように7は完全数で、これは御霊の完全な働き、豊かな働きを意味しています。また「御座の前は、水晶に似た、ガラスの海のようにであった」とあります。思い起こすのはシナイ山で長老たちが神を仰ぎ見て食事をした際、その神の「御足の下にはサファイアの敷石のようなものがあり、透き通っていて大空そのもののようにであった」とあることです。色々な議論はありますが、これは御座の前の美しさ、純粹さを表していると思われまます。

そうして御座の周りで仕えるもう一つの存在が6節後半から記されます。御座のあたり、御座の周りに4つの生き物がいたと。「第一の生き物は獅子のようであり、第二の生き物は雄牛のようであり、・・・云々」と。古代世界では王座や王宮には、そこを守るための翼のついたライオンとか、翼のついた雄牛の像が立てられました。聖書ではそのような役割を果たすものとして天使的存在であるケルビムのことが述べられています。先に言えば、この4つの生き物もケルビムのような天使的存在と思われまます。それにしても初めてここを読む方は驚くかもしれません。「第一の生き

物は獅子のようであり、第二の生き物は雄牛のようであり、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は飛んでいる鷲のようであった。」 一体これは何なのか、と。しかし旧約聖書を知っている人にとってはそうではありません。あ～、あそこに出て来るものと同じだ！と。エゼキエル書1章にはほとんど同じ幻が記されています。そこにも4つの生き物が出て来て、10節にヨハネが見たのと同じ獅子、牛、人間、鷲の顔が出て来ます。細かいところでは違いもあります。エゼキエル書では4つの生き物それぞれに今見た4つの顔がついていました。つまり一つの生き物に4つの顔がありました。それに対してヨハネが見たのは一つの生き物は一つの顔を持つというものでした。またエゼキエル書の生き物は翼が4つでしたが、ヨハネが見たのは6つでした。そしてこのヨハネが見た生き物と関連があると思われるのはイザヤ書6章に出て来るセラフィムと呼ばれる天使です。この天使は6つの翼を持っていて、ヨハネが見たのと同じです。

果たしてこの天使的存在の意義は何でしょうか。獅子、雄牛、人、鷲は、それぞれ自然界における生き物の優れた側面を強調するもののようです。ライオンは力を、雄牛は従順に働く奉仕を、人間は知性を、そして鷲は速さを。これらには神が創造したいのちある被造物に見られる神の知恵と力が端的に示されています。ですからおそらくこの4つの生き物とは、そのようないのちある被造物全体に対応し、それらを代表する天使たちのことではないかと思われます。その生き物には目がたくさんついていました。絵に描くとグロテスクなものになりそうですが、その目をもって神に仕え、神に奉仕し、神に用いられる存在であることを示しているのでしょう。

大事なものはこれらの存在が何をしていたかです。一言で言えば、神を礼拝していました。まず4つの生き物は8～9節で休みなく賛美していました。「聖なる、聖なる、聖なる」という3回繰り返された言葉は、先に触れたイザヤ書6章のセラフィムの賛美を思い起こさせます。「聖」という言葉の基本的意味は区別されるということです。この方こそ他の一切の被造物とは区別されるべき、ただお一人あがめられるべき主なる神である。「全能者」という言葉は第3版までは「万物の支配者」と訳されていました。この神こそすべてを治め、支配しているまことの主権者、全能者であられる。そして「昔おられ、今もおられ、やがて来られる方」は1章4節や8節でも言われていました。この方には始まりもなく、終わりもなく、永遠に存在され、いつもそこにおられる不変の神。4つの生き物がこのように礼拝している姿は、

いのちあるものはこのように神を中心とし、神を礼拝するのが本来の姿であることを暗示します。ただお一人の聖なる全能者に、9 節にある通り、栄光と誉れと感謝をささげるのです。

そして10～11 節には、24 人の長老たちもひれ伏して礼拝する様子が描かれます。「ひれ伏す」とは心から進んで尊敬と服従を献げることです。また「自分たちの冠を御座の前に投げ出した」とあります。これは救われる民が冠をいただくことと対応しています。しかし彼らはその冠を投げ出す。それはこの方の前でそれをかぶったままでいるのはふさわしくないと感じるからです。一切の栄光と誉れは神に帰して賛美することがふさわしい。11 節で「主よ、私たちの神よ。あなたこそ栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方」と告白されています。そしてここでは特に神の創造のみわざが賛美されています。11 節後半：「あなたが万物を創造されました。みこころのゆえに、それらは存在し、また創造されたのです。」 ここまでが天の御座の光景の前半です。続きは次回の5章に記されます。

果たして今日の箇所にはどんな意味があるのでしょうか。地上の教会は戦いの中に、また苦しみの中にありました。この後もまだまだ試練があると言われました。そんな中、この4章が教えていることは何でしょう。それはこの世界の真の主は誰かということです。それは御座に着いている方である！ということです。人間の目に見えるところでだけ判断するならば、当時の世界はドミティアヌスが治めていました。また様々な権力者が今もこの世にいます。様々な力が働いています。しかしこの4章が教えていることは、神がこの世界の主、マスターであり続けているということです。地上の王座よりもはるかに高いところに天の御座があって、その御座に着いているお方がいる。そしてその天の御座の前では全く混乱がない。慌てた状態になっていない。緊急事態宣言を出すような状態にはなっていない。むしろ天使的存在があらゆる賛美と誉れをこの方に帰して礼拝しています。彼らが賛美しているように、この世界は「神の世界」です。神が万物を造り、目的をもって創造されました。その目的は必ず達成されます。この光の下ですべてのことを捉え直すということです。様々なことが私たちの周りでは起こるかもしれませんが、私たちが経験するあらゆることは、この方の主権的計画とみわざの一部なのです。

私たちはこの宇宙の管制塔、コントロールタワーに上らせていただいた者として、

細かな一つ一つの事柄は分からなくても、全体をしっかり支配し、制御しておられる全能の主がおられると知って安心し、迷うことなく、この神に信頼してまっすぐに進んで行けば良いのです。神はこの世界を創造し、保っておられる方として、必ずそのゴールまで導いて行ってくださいます。そして主権者として、悪を最後には必ずさばかれます。しかし罪ある私は大丈夫なのか、救われるのかという問いに対しては、次の5章が光を与えてくれます。そこには創造主ばかりでなく、贖い主がおられることを私たちは見ることになります。この方を見上げて信頼し、日々従いつつ、私たちも天でなされている礼拝に合わせて、御座に着いている方への心からの賛美と感謝の礼拝をささげる者とされたいと思います。そしてこの方によって必ず創造が目指すゴールに達する者とされて、いよいよこの神を礼拝し、賛美し、この神を喜ぶ神の民の幸いに生かされて行きたいと思います。